

ほんとに「誰にでも」なのか

医療福祉ジャーナリズム分野 松田美恵子

高橋先生、貴重なお話をありがとうございました。

私の職場の向かい側の席には、視覚障害の男性がいます。弱視の彼は、字を見るときは拡大鏡で、パソコンを見るときは顔を画面にくっつけるようにしています。でも、彼は仕事が早く、的確で、周りの人は、彼の視覚障害を殆ど意識することがありません。

私たちは、紙に書かれた文章を、一文字ずつではなく、全体をざっと見て内容を概括的に頭に入れることがよくあります。彼は、書かれたものの最初の一文字から最後まで読んでいます。頭の中で全体像を作るのだと思うのですが、他の人と資料を見ながら話をするとき、殆ど時間のずれがありません。おそらく、彼の頭の中ではものすごい速度で意味や構成を組み立てているのだと思われ、その処理速度に驚きます。

高橋先生の講義から伺われる、わかりやすさ、思考の速さ、ユーモアのセンスなどを感じながら、彼を思い出していました。

視覚障害の方は、大変なご苦労と努力があるはずなのに、それを感じさせないほどの高い能力を磨いていらっしゃるのだと感じました。

けれども、高橋先生がおっしゃったように、たとえ耳で何でもわかる能力を鍛練して身に着けたとしても、それはその人を助けるのみ。社会環境を改善して視覚障害者全体を支援したほうが、効率が良いですね。

私たちは、美談を好みがちですが、障害の解消を個人の問題に落とし込んでしまうのでなく、社会のシステムとして考えるべきであることを痛感しました。

おもちゃにかける先生の情熱も伝わってきました。おもちゃが子供にとって、外界と接触する最初のツールであり、コミュニケーションの手段でもある、ということがよくわかり、もっと早く知っていたら、わが子のおもちゃ選びにも注意を払ったかもしれません。電子化する日本のおもちゃへの懸念、それが大人の世界の追従であることなど、耳の痛い話です。

製造基準や一般市場の中で、生き残れる共遊玩具を作るのは、大変苦労の多いことだと思います。取り組んでいる方々のご苦労がしのばれます。

でも、ものづくりやデザインを通じて、新たな価値創造ができることは、素晴らしいことで、羨ましくもあります。ON側のポッチで、目の見える人も見えない人も便利になるなんて、目からうろこです。

これからもどんどん発信し続けて、目の見える人間の気づかない世界、感覚を是非、教えていただきたいです。私も、改めて、「誰にでも使える」がほんとに「誰にでも」なのか、いつも問いかけていきたいと思います。